「眞宗學と佛教學」

舟橋一哉

凡そ佛教學の研究に二つの傾向が考えられる。一つは、從來の傳統を尊重して傳統の通りにそのまま傳えて行こうとするものであり、他は、傳統を超えて、或る意味においては傳統を破つて、佛教の精神を明かにして行こうとするものである。前者は、佛教の學問をそれぞれの型にはめて、その型をおぼえるということであり、後者は、その型を破つて現代の感覺でもつて佛教を理解しようとするものである。ところで、この二つの傾向は、ともに一長一短があつて、どちらが勝れているかということは、にわかに決定し難い。傳統を重んずる型にはまつた佛教學は、そこから極めて優秀な成果を期待することはむずかしいが、しかし或る程度の成績は確保することができる。點數をつけるならば、いつでも六十點から七十點までの範圍の内にある。ところが型破りの佛教學では、極めて優秀なものも生れるかわりに、ことによると落第點をとることもある。或はマイナスの點數がつけられることもあり得る。そういう危險を含んでいることを常に注意しなくてはならない。

このことは小乘佛教と大乘佛教との性格の相異でもある。小乘佛教は型を尊重する佛教であるから、そこからは決してマイナスの佛教は生れて來ないが、新時代に卽應した優秀な佛教も出て來ない。ところが大乘佛教はそういう型にとらわれない佛教であるから、日本の鎌倉佛教のように、極めて優秀なものがそこから生れて來ることもあるが、佛教としてはマイナスとしか思われないような邪教がそこから出て來ることもある。一般に左道密教といわれるもの、立川流の如き、その一例であろう。淨土眞宗の信仰の中にも、祕事法門として隨分いかがわしいものがあるようであるが、それらも佛教としてはマイナスであろう。

さてこれら二つの傾向の佛教學は、どちらにも偏らないで、二つが相互に相手を牽制してゆくところに、正常な佛教學の發展があると思われる。國會にたとえるならば、傳統的佛教學は參議院のような役目をもち、型破りの佛教學は衆議院のようなものである。

そこで傳統にとらわれないで、型破りの佛教學の立場に立つて、眞宗學と佛教學との關係を考えて見ると、凡そ二つの立場が見られる。一つは、「眞宗學も佛教學である」という立場、他は逆に「佛教學も眞宗學である」という立場である。前者の立場では、「眞宗も佛教の一流派にすぎないのであるから、佛教學という中には當然眞宗學も含まれていいはずだ」ということになる。ここでは、佛教にいろいろの學派がありいろいろ宗派がある、それらの中の一流派としてのみ眞宗を眺めているのである。眞宗の獨自性はそこでは認められていない。これは、もう一段と廣い立場からいうならば、「佛教學もインド哲學である」という學問的立場と同じものである。「インド哲學の中には、ベーダもウパニシャッドも六派も含まれるが、それらに伍して、佛教というものがある」というように考えるのである。ここでは、佛教は單なるインド哲學思想の一分野を形成す

るに過ぎないものとなる。大體において、官立の大學において「佛教」が研究せられる學問的立場は、これである。殆どの官立大學で、佛教が研究せられるときインド哲學講座の中で佛教が研究せられている現狀は、そのことを示している。これは實證的な立場に立つ佛教學である。

ところで、今度は逆に、「佛教學も眞宗學である、」という立場がある。少くとも私において佛教が學問せられる理由は、眞宗の教えを明かにする、ということ以外にないのであるから、そういう意味からいうならば、「佛教學も廣い意味における眞宗學の一分野である、」ということがあると思われる。つまりここでは、佛教學は眞宗教義の背景を明かにするという意味しかもつていない。或は、眞宗教義の奥行きの深さを示すもの、といつてもよいであろう。少くとも大谷大學において佛教學が學習せられる意味は、こういうところにあると思われる。

ところでこれら二つの學問的立場は相互に矛盾衝突するものであろうか、というと、私はそうは思わない。「佛教學も眞宗學である」という學問的立場――これをかりに主體的佛教學と名づける――は、ややもすると偏狹になり易い。「眞宗學も佛教學である」という學問的立場――これをかりに實證的佛教學という――からするところの佛教學をすべて排斥し、そういう佛教學の意義を全く認めようとしない。「そういうものは佛教學ではない、」というようにさえいう。けれども私は、そういうことであつてはならないと思う。實證的佛教學の成果にもつねに關心をもち、世界の佛教學界の水準にも廣く眼を開いて、充分に理解と尊敬との念をもつて實證的佛教學をとり入れ、その上に立つてのみ主體的佛教はうち建てらるべきであると信ずる。

そこでそのような立場よりするところの佛教學の一課題として、私は次のようなことを問題として見たい。

一、眞宗學でいうところの機法二種の深信ということは、佛教學でいえば、眞空妙有ということである。なぜならば、「空」とはものを否定すること、「有」とはものを肯定すること、從つて「眞の空は妙なる有である」ということは「否定卽肯定」ということで、平らな言葉でいえば「このままではいけないが、このままでよろしい」ということ。そのことが眞宗では、二種深信という形で說かれるのである。從つて二種深信はそういう立場で理解されなくてはならないこと。

二、眞宗學でいうところの正定と滅度とは、佛教學でいえば見道と無學道とに當る。兩者の間には近くて遠いという關係が見られること。

三、往生思想について。

四、宿業の思想について。

これらについては、別に改めて論じたい。